

中 村 遺 跡

—松代西条小学校地点遺跡の調査報告—

1978.3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序 文

「歴史の町」といわれる長野市松代町は、その昔真田十万石の城下町として栄え、真田家の靈屋、旧文武学校、松代城跡をはじめ数多くの史跡等文化財があります。なお、時代をさらに遠くさかのぼりますと、縄文の昔をしのばせる遺跡や、考古学的にも重要な古墳も沢山に見ることができます。

これら先人の残された貴重な文化遺産を大切に保存し長く後世に伝えて行くことは私たちに与えられた大きな義務であると思います。

一方、社会の急激な変化により、宅地造成、高速道、新幹線等の開発事業もさかんになり、「開発」と「文化財保護」とは大変難しい問題になって来ております。これからも「開発」と「文化財保護」の調和をよく検討、考慮して将来に悔いを残すことのないようにする必要があると思います。

このたび、松代西条小学校の校舎改築にあたり校舎敷地の発掘調査を実施いたしましたが、調査団長の森島先生はじめ調査員のみなさん、および発掘作業にご協力いただいたP T Aのみなさん方のご苦労は大変だったと思います。

ここに報告書の刊行にあたり、あらためて心から御礼を申し上げます。

昭和53年3月25日

長野市長

柳原正之

序 文

松代真田十万石の城下町として知られる長野市松代町は、数多くの史跡等の文化財に恵まれ、また、以前から貴重な遺跡や古墳群の存在が確認されておりました。私たちは、これら祖先の残した貴重な文化遺産を大切に保存し、将来に長く伝えて行くべき責務があります。

このたび、松代西条小学校の校舎改築にあたり、長野市遺跡調査会を設置し、森島稔先生を調査団長にお願いして校舎敷地の発掘調査を実施いたしました。

この貴重な遺跡の発掘調査結果を記録保存するため、調査報告書を刊行いたしましたので、考古学研究の一助として、また、文化財保護事業の資として大いに活用いただければ、幸甚と思っております。

なお、小学校校舎改築工事が迫っていたため、調査が短期間であったので、調査にあたられた方々は本当にご苦労が多かったと思います。

あらためて心から感謝を申し上げます。

いまここに新らしい鉄骨3階建の新校舎をあおぎ見るととき、児童の教育環境整備のため、ご多忙の折にもかかわらず、よくご理解、ご協力をいただきました地元関係の方々および西条小学校PTAのみなさんに心から厚く御礼を申し上げる次第であります。

昭和53年3月25日

長野市遺跡調査会長

長野市教育委員会教育長

中 村 博 二

例　　言

1. 本書は、昭和52年度に長野市と長野市教育委員会の委託を受けた長野市遺跡調査会との契約に基づいた発掘調査報告書である。
2. 本書は調査によって検出された遺構・遺物に重点をおいた。尚遺物の詳細については図前頁に表にして記した。
3. 遺構図、遺物の実測図及び写真は矢口が担当した。
4. 遺物実測図中、推定復元可能なものは鎖線で、又黒色処理されたものは△でそれぞれ表示した。
5. 遺構・遺物の担当者の分担は、調査員が協議をして決め、文責はすべて矢口にある。
6. 遺物・関係図面及び諸記録は長野市教育委員会で保管している。
7. 本書の編集は事務局で行い、森嶋調査団長の校閲をうけた。
8. 印刷関係の業務は事務局が担当した。

本文目次

序 文	長 野 市 長 柳原正之
序 文	長野市遺跡調査会長 長野市教育委員会教育長 中村博二
例 言	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 分布調査とその結果	1
第3節 調査日誌	2
第4節 調査会の編成	3
1 調査会	4
2 調査団	4
第2章 遺跡周辺の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺構と遺物	8
第1節 第1号遺構	8
第2節 祭祀遺構	8
第3節 溝址	9
第4節 土層序	9
第5節 その他の出土遺物	10
第4章 結語	12

挿 図 目 次

第1図 中村（西条小学校）遺跡周辺主要遺跡分布図	17
第2図 遺跡地形図	18
第3図 調査地及び遺構は配置図	19
第4図 第1号遺構・溝址実測図	20
第5図 祭祀遺構実測図	21
第6図 Aトレンチ東西断面土層序図	22
第7図 遺構出土遺物実測図	23
第8図 その他の出土遺物実測図	24

図 版 目 次

第1図版 調査地遠・近景	25
第2図版 調査地・第1号遺構	26
第3図版 第1号遺構・溝址	27
第4図版 祭祀遺構	28
第5図版 土層序・調査スナップ	29
第6図版 出土遺物	30
第7図版 祭祀遺構出土遺物	31

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

高遠山から流下する神田川は松代扇状地の西側扇央を形成する。遺跡はこの扇状地の扇頂付近にあり、その範囲はこの河川の流路に沿って旧流路より生み出された所謂中洲状の縦に長い微高地全域に推定される。分布調査での遺物散布は濃淡の差はあるがその範囲内より採集されうる。しかしその量は決して多いものではなく、またそのほとんどが小破片で、磨耗しており、神田川の押し出しによりもたらされたものか、又は浮き出した遺物がその流下による結果として採集地にもたらせたものの両者の主因によるものと考えられる。そのため主たる遺構（生活址）の痕跡を求め得ることは不可能に近い状態にあったため、前述の分布調査ではこの微高地全域を中村遺跡として把握した。^{註1} この遺跡内に存する西条小学校の老朽校舎改築事業が前々より計画されていたが、昭和52年度事業としてその実施が具体化されるに至り、遺跡の時期・性格が縄文時代あるいは古墳時代・平安時代であるのか、また該期の生活址があるのか、単なる包蔵地であるのかいま一つ判然としない面を有していた。このためと、本地では学術的な調査がなされておらず、神田川が松代扇状地に溢水をもたらす荒川であるとの性格から、遺跡全域はこの影響により砂利層の堆積が比較的厚いであろうと予想されたため、機械力と人力の両面からの調査が必要であると判断し、それらの資料を得るために試掘を伴う分布調査を実施することにした。この分布調査は老朽校舎（改築校舎）の北側に隣接する中庭に改築が計画されているため、事前に実施するもので、昭和52年6月7日～8日の2日間をあて、工期等の関係からその結果（包含層及び遺物出土状態・生活址等）いかんによっては引き続き本調査を実施することにした。

第2節 分布調査とその結果

分布調査は校舎改築予定地約 550m² のうち主軸（東西）に沿って南北予定地境界付近に2本のトレンチを設定し、機械力により調査を実施した。トレンチの規模は主軸方向に約30m、幅約1.5mである。包含層は小礫混り黒色粘質土層であり、厚いところで45cmを計測する。この層上面から表土まで約1.2mあり、すべて大小の差はあるが小石を含む砂利層で、遺物は全く含まれなく、ただ上部より近代陶器（茶碗）片を3点得たのみである。さて包含層中の遺

物であるが、その散布は東端付近に縄文時代遺物が、中位付近で土師器片を集中的に得、その周辺は皆無といつてよい程の状態であった。そこで更に詳細な資料を得るために、この包含層を丁寧にさらうこととした。2本のトレンチのうち北のものをA、南のものをBと呼称し、その対象をAに求め、遺物集中地と生活址の関係を主として調査を進めた。その結果は調査地中央付近に焼土を伴う何らかの遺構を想定したが、断面から察するに明確なる落込でなく、また覆土が薄い点注意された。遺物の出土量は多い。東端付近の縄文時代の遺物は後期から晩期にかけてのもので、量はそれ程多くないが、何か落ち込みらしきものが確認された。更にBの調査に移り、Aの経験から包含層を薄く剥離することを繰り返し、遺物の有無と遺構の検出を主に調査を進めたが、遺物は散見する程度の出土であり、遺構は全く確認されず、生活址を想定することのできるものはなかった。

以上のような調査結果を得、当初想定していた遺跡の主要部からはずれているとの結論を得たのであるが、遺物包含層他2基の遺構を確認したので、今調査に動入した機械力を有効に生かすため、引き続き調査を実施することにした。今後の調査方針として、遺構検出地及び主要包含層周辺の小石を含む上部砂利層の撤去を行い、この除去後を人手によって精査することにした。ただAは調査地（破壊部北端にあたり、また築山中庭として残存する）最北端付近に設定したもので、それ以上の調査はできなかった。

第3節 調査日誌

1. 分布調査

6月7日（晴） 遺構確認と包含層及び層序確認のため機械力（バックホー）による調査を行う。包含層（小礫混り黒色粘質土層）は予想していたより深く、またその土層は砂利で埋まっている、機械力でも苦しい作業であった。包含層上でレベルを一定にし、徐々に掘削を進めた結果、東端（川寄）付近より縄文時代後期以降の遺物を検出し、それより西に移行するにしたがい該期の遺物は激減する。このトレンチは調査地最北端のもので東西方向に約30mを設置し、また最南端付近に更に前者とほぼ平行に同規模のトレンチを設け、前者をA、後者をBトレンチと呼称する。Aトレンチ中央以西より、焼土・土師器土器片が多く出土しているが、Bトレンチからはその痕跡は全く認められない。日照の関係で確認を明日にゆづる。

6月8日（晴） Bトレンチの調査を昨日に引き続き進める。包含層中からは磨耗した土師器片数点確認したのみである。Aトレンチ遺構確認調査では昨日検出した焼土を伴う土器集中出土地が落込の一部であることを確認した。更にBトレンチの掘削終了後、東端付近の拡張を行う。この間本調査に移るべく関係各機関と協議し、明日から実施することに決した。土層序の実測をする。

6月9日（曇） 昨日拡張した縄文時代遺物を出土した地点の残土処理をバックホーの助けをかりながら調査を進める。包含層上面からの遺物は皆無に等しい。この調査を進行しながら、焼土を伴う土器集中地周辺の掘削をする。

6月10日（曇） 本日より人力による調査を実施する。包含層は小石・砂利が多く、草搔の刃が目にみえて破損する。遺物はほとんどない。遺構としては一辺2m位の住居址と思われるものを検出し、明日への期待を寄せる。この他この住居址東端を切って流れる溝及び自然的流下する溝を確認する。

6月11日（晴・曇） 住居址の調査を主に溝址の調査をも進める。土砂運搬用のオートキャリアの扱いに苦労したが、次第に慣れ、調査が順調に進む。住居址中央部東西方向に焼土が帶状に検出され、また東北隅付近に自然石の集まりをみたが、ともに意味不明。当初縄文時代の住居址を想定していたが、床面近くから高坏の出土があり、古墳時代所産のものであることが判明した。溝址の覆土は淡黄褐色の小砂利層で、自然流を思わせる。この溝址からの出土遺物は磨耗した須恵器片を2点検出した。

6月12日（曇・小雨） 昨日に引き続き同遺構検出に全力を上げる。住居址の精査と実測、写真撮影作業を行う。Aトレソチ中央の焼土を伴う土器集中地の残土処理を実施する。午後時々降雨があって、梅雨時期でもあり、先の調査が思いやられる。

6月13日（曇・晴） 昨日と同様残土処理及び周辺の調査を実施するも、包含層が粘土質であるため困難であった。それでもかえって土質及び色調を観察する上ではその差を的確に把握することができ好都合であった。この遺構は不整の円形のプランになる可能性がある。

6月14日（曇） 昨日の調査を繰り返し再度遺構の確認を行う。プランは前日確認したものとほぼ同様であるが、南はややとがり、北は土層断面からの判断によると偏平になるようである。遺構内全面に土器片が散布し、大小の礫が混入する。土器の個体確認及び集合度を鑑み、出来る限り原位置のまま残すように調査を進める。焼土は壁付近に顕著に認められた。甕形土器の破片が多く目につく。本日で主調査を終了する。写真撮影及び一部実測を開始する。

6月15日（晴） 実測作業を主体に、土器の取り上げ、細部写真撮影等を実施した後、遺構の性格判断のため精査を行い、本調査を終了する。おりしも雨期だったので、その影響を心配したのであるが、わずか1日のそれも数時間だったので、調査は計画どおり進行し、当初の目的を達成した。

6月16日 器材撤収作業を行う。

10月1日～12月19日 土器洗浄作業及び接合、注記作業を行う。

2月1日～2月28日 原稿執筆作業を行う。

第4節 調査会の編成

長野市遺跡調査会は市内に存する埋蔵文化財の保護のため設立されたもので、規約第1条(目的)で次のような任務を帯びている。「この調査会は長野市教育委員会の委託を受けて、長野市所在の埋蔵文化財等遺跡の発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について、研究することを目的とする。」

1 調査会

会長	中 村 博 二	(長野市教育委員会教育長)
委員	米 山 一 政	(長野市文化財保護審議会会长)
"	桐 原 健	(" 委員)
"	森 嶋 稔	(調査団長)
"	横 山 勝	(長野市教育委員会教育次長)
"	関 川 千代丸	(長野市教育委員会嘱託)
"	矢 口 忠 良	(" 社会教育課主事)
" (監事)	松 坂 輝 朝	(長野市教育委員会庶務課長)

2 調査団

団長	森 嶋 稔	(日本考古学協会員・上山田小学校教諭)
主任	矢 口 忠 良	(" " 社会教育課主事)
調査員	片 山 徹	(長野県考古学会員・信大学生)
	鳥 羽 英 錠	(" ")
	百 澄 久 雄	(" ")
調査作業員	原田勝三・降旗みち子・海老原秀子・松本富子・西条とき子・中西 操・富岡 広・石坂昭夫・宮沢康夫・堀井厚志・富岡 仁・水野倉恵美子・北島倭子・滝沢孝子	
事務局	事務局長 (社会教育課長)	丸 山 喜 正
	担当局員 (" 補佐)	松 橋 順
	" (" 文化財係長)	内 田 早 苗
	" (" " 主事)	矢 口 忠 良
	" (" " 嘱託)	関 川 千代丸

この他西条小学校長はじめ学校職員、同校PTA・同校建築担当学校施設課・同建築請負工事者北信土建(株)その他多勢の人々から御支援御協力をいただいた。簡略ながら代表名称を記して深謝の意を表します。

— 第1章 註 —

註1 昭和49年度県教育委員会と長野市教育委員会の分布調査による(第2図)。

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

松代地域の地形は清野地区及び寺尾地区にみられるように、旧千曲川流路による帯状の典型的な自然堤防と後背湿地（凹地）になり、千曲川右岸の所謂彎入低地であるが、ただ現在の松代市街地附近はこの影響を受けながらも趣を異にする。それは清野地区から東流してきた旧千曲川が山の突出部の硬い安山岩層にさえぎられ、流路をかえて北流するのであるが、更に蛭川に代表される諸河川よりもたらされた東部山地からの多量の崖錐堆積により、旧千曲川を更に西に追いやり、後世人為的な力が加わってはいるが、扇状地として現在の地形になるという二つの要素から成り立っているということである。ちなみに松代扇状地は皆神山の左右を流下する豊栄地籍を形成する関屋川・東条地籍を形成する藤沢川それに本遺跡の所在する西条地籍を形成する神田川の主要河川の合体影響により形成される。

さてこのような中にある本遺跡周辺を瞥見すると、前章で触れたところであるが、遺跡は西条断層面に規制された神田川の押し出しによって形成された所謂中洲状の微高地上にあり、また標高が神田川の起点たる高遠山で1,205m、遺跡所在地付近385m、松代扇状地中央付近が356m、同先端の松代城付近では355mを計測するように所謂西条扇状地の扇頂下にあり、比較的急傾斜面に位置する。この扇頂は東から突出する舞鶴山の影響によるもので、その上部には狭細なもの（第一次扇状地）があるが西側象山に至る山地の峡谷からはじまり、関屋川の影響がある白鳥山々麓までを開析しその幅約2kmである、ここまで縦貫長（舞鶴山最突出部より）は約1.8kmである。この流路及び山地が地形上規制した地目は、微高地が宅地、畠地であり、山麓部は畠（桑）地になり、この間の凹地は水田化している。この扇状地下方は扇状地形も平旦に近くなり、宅地を除きそのほとんどが水田となる。また舞鶴山と白鳥山の彎入部は水田となり、前述の松代耕作面の主体部に接合する。このような水田面に見られる天井川はこの地でもみられるところであり、その傾向は下流にいくにしたがい顕著になるが、本遺跡地ではむしろ、地形的勾配に従い、鉄鉋水等の洪水の被害が大きかったようであり、近くは昭和37年にその害があり、その河川の掘り込みを含めた護岸工事が施された程である。またこの工事が行なわれた所謂第一次扇状地は川底が上昇しつつある。この地形を形成した神田川は地蔵峠付近を源とする前述の関屋川と合流し蛭川となり、寺尾地籍南で、中央山地と東部山地を縦貫する千曲川に注ぎ込む。^{註1}

第2節 歴史的環境

神田川流域における先人の軌跡は、松代真田藩当時のもの（松代城、文武学校、新御殿、真田家靈屋、武家屋敷の一部、それにゆかりの社寺等の建造物）があり、また本遺跡がのる扇状地上部に位置する清水寺・西楽寺には重要文化財を含む藤原時代から鎌倉時代にかけての古仏像が残されている等歴史的遺産が周知されており、これはまた当地の時代を示す顕著なもの^{註2}事象の一つである。さて古代以前の考古学的資料等は前者の華々しさに比べ、影に隠されたくらいが多分にあるが、その内容には重要なものが多い。『松代町史』^{註3}が疑いなしと記する「和名抄」にみえるところの英多郷の位置関係を知る遺物が四ツ屋遺跡から出土しており、更に松代地域の古代、中世の研究がこれら考古学的基礎資料により進展するものと思われる。これよりさかのぼり考古学的に周辺の遺跡をみると、縄文時代では、土器片の他石棒・石鎌、石匙等の発見は『松代町史』に詳しいところであり、本遺跡西の母袋山々麓の鹿島遺跡からは、打石斧等を得た記録がある。近頃では神田川護岸工事中発見された後・晚期の遺物の発見があり、当地における立地的下限と目されており注意される。また本遺跡上方にある高遠山中腹尾根上の緩傾斜地にある昭和29年に調査された稻葉遺跡では、早期の押型文土器をはじめ前期、中期に亘る遺物が採集され、長野市において該期の遺跡では重要なものの一つである。^{註4}弥生時代では遺物が散見する程度で見るべきものはないが、調査はこれからであり、後述の舞鶴山古墳成因の基礎となる時期にあたる関係から期待される遺跡の存在する可能性が強い。また稻葉遺跡同様山地にある宮の平から太型蛤刃石斧が単独出土しており、同石器の用途を考える上で興味深い資料である。古墳時代から盛隆がみられ、舞鶴山（現運輸省気象庁松代地震観測所の上部山頂）には松代地域では最古と目され、5世紀代の所産と推定される舞鶴山古墳1・2号墳があり、そこからは皆神山と以西の松代扇状地が臨まれる。第1号墳は舞鶴山の西突端最頂部にあり、径33m・高さ5.5mの大形の円墳で、第2号墳はそれより北にさがった山頂平坦部に構築された前方後円墳で、長軸36.5m・後円部径約20mを計測する。^{註5}これに直接後続する古墳は当地でまだ確認できないが、西の母袋山々頂（687.7m）の善光寺平において最高地に母袋山将軍塚と称する円墳もあるが詳細は不明である。後期古墳としては北組・欠組にかけて丸塚古墳群6基があったようであるが、現在では不明である。ノロシ山北麓の閑屋川に開析された扇状地形内の河岸段丘上に、現在の松代高校範囲までの総体として虫歌・宮崎古墳群があり、40余基確認されているが、開発の著しい地域だったので、原形をとどめるものは上流に10数基確認できるのみである。ただこの中には扇状地狭隘地があるので所謂ヤックラも含まれる数値である。規模は径10~15mで、高さ1.0~2.0mの積石を用いた小規模なものである。内部主体出土遺物は不明である。^{註6}この他皆神山々腹北西突起部に径30m・高さ4.3mの円墳があり、内容は不明である。この古墳は後の手を加えられているが、ほぼ完存する。^{註7}またこれらを支えた基

盤となる集落址について、松代高校東から、中条遺跡本町第2工場東側水田遺跡等の確認はあるが、総体としての研究はこれからであり、弥生時代同様今後期待されるところである。奈良時代そのものの様相把握は遅れており、今後の研究課題の一つになっている。平安時代においては本遺跡全体に遺物が広く散布しており、住居址の拡散的状況が想定され、その内容は今後の調査にまたれる。このように松代西条地区扇状地上の遺跡は神田川の規制を受けながらも、縄文時代から平安時代までの遺跡が存在しており、時間的差はあるが、これらは有機的連がりを直接・間接的にもちらながら存続していたものと考えられ、本調査遺構・遺物もその中に性格を求められると思える。

— 第2章 註 —

- 註1 更級埴科地方誌刊行会編『更級埴科地方誌第一巻自然編』昭和43年。
- 註2 長野市の文化財図録刊行会『長野市の文化財』昭和46年。
- 註3 松代町史復刻続町史刊行会『松代町史上巻』昭和47年復刻。
- 註4 長野市教育委員会により昭和51年度に発掘調査された清野小学校から「松井」と刻字された須恵器环形土器片が出土した。戸隠神社蔵の妙法蓮華経版木の末書に「英多庄松井住 藤原正長元享元年酉三月十八日」とある。
- 註5 笹沢浩「北信松代町中村神社出土土器」長野県考古学会連絡紙12号・昭和40年 後期初頭の遺物を主として報告され、鹿角・木炭及び石器・剝片等が出土している。この報告では、前記の遺物は地表下約2.5mで、神田川河床下で包含層は20cmの厚さを有するという。
- 註6 永峰光一他「長野県埴科郡松代町西条地区入組稻葉遺跡調査概報」『信濃』Ⅲ 9—4 昭和32年 尚この遺跡から灰釉陶器を伴う平安時代住居址2軒を検出している。
- 註7 米山一政・岩崎卓也「舞鶴山1号墳・2号墳調査報告」昭和51年3月22日～4月3日まで清掃発掘及び地形測量を、東京教育大学で行なわれたものである。詳細は筆者等により本報告があるものと思う。第1号墳には2ヶ所の竪穴石室があったようで、一つは割石が用いられ、他は木棺直葬と報告され、後者から以前に石製刀子が、今回の調査で珠文鏡が検出され注目される。第2号墳は第1号墳の後続のものと考えられており、鉄器（釘又は鎌）2本と須恵器が出土している。
- 註8 皆神山を中心とする周辺の古墳群に桑根井・鎧塚古墳群23基、菅間関谷古墳群3基、竹原古墳群10余基、熊穴沢3基、長礼山古墳群（天王山古墳含）5基がある。
- 註9 信濃資料刊行会『信濃考古学綜覧上・下』昭和45年重版・長野県教育委員会「長野市遺跡分布地図」昭和52年

第3章 遺構と遺物

調査地は改廃校舎前面の中庭にあり、前記校舎と中庭築山の間にある。そのためこれらにより制約をうけ周辺の遺構は確認できなかった。さて本調査地で検出した遺構は、第1号遺構（住居址）・祭祀遺構・溝址であるが、この他に縄文時代等遺物包含層を確認したのみで、通常的な生活址は認められなかった。

第1節 第1号遺構(第3・4・7図, 第2・3図版)

遺構 調査地東側の神田川に近い位置から検出したもので、溝址により東壁の一部が破壊される。プランは方形を基本形とするが、北側中央が張り出す。東西軸2.16×南北軸2.65mの小規模なもので、またその掘り込みも検出確認値で、北壁6cm・南壁8cm・東壁9cm・西壁8cmと浅い。主軸方向はほぼ東西軸と同じである。床面は地形的影響を受けて南・東側で若干高くなるが、縦じて平坦であり、軟弱である。壁は緩傾斜を呈する。その他北壁中央より東にかけての張り出し部付近に河原石及び角礫を主とする集石遺構が確認され、その一部は破壊原因たる溝址壁及び下流に認められる。また本遺構中央・東西軸線には長さ1.5m、巾0.7m、厚さ1~2cmの焼土があり、その範囲は長さで本遺構中央まで及び、その中より高環形土器脚部2点を得た。カマドは当初北壁張り出し部集石に求めたが、壁・集石にその痕跡がない故、前記焼土をもってそれにあてるこども可能であるが、この焼土は西側裾部で本遺構床面に接し拡散し、その主要部は下に黒色粘質土を抱えており、また床面・壁に焼土化した痕跡がないので理解に苦しむ。

遺物 出土量は少ない。覆土中より縄文時代後・晩期と認められる粗製土器片を数点採集された他、高環形土器脚部2点を焼土中から、床面近くから甕形土器片を得たのみである。

第2節 祭祀遺構(第5・7図, 第4図版)

遺構 調査地ほぼ中央付近から検出したもので、分布調査中、焼土及び河原石、小形丸底形土器等土器集中地を確認した地点で、住居址の期待をもたせた地点である。プランは南北軸4.45m×東西軸（推定5.25m）の卵形の不整梢円形を呈する。壁は緩傾斜で焼土を残す。掘り込みは南・東壁で6cm・西壁で9cmを測り、遺構は浅い。床面は軟弱で、いくぶん中央付近が

凹み、焼土はほとんどない。覆土には頭大から拳大の河原石が全面に散在し、その中に各種土器片が散布する。南側に有段口縁を有する甕形土器片が集中しており、高杯形土器片は全体的に認められる他、中央よりやや北側から石製模造品・鉄鏃が出土し、トレンチ南断面から小形丸底形土器の出土をみた。

遺物 高杯形土器片（8～17）が目立ち、図示できるものでも10個体を数える。杯部と底部との接合部の稜線は鈍く、杯部は皿形になり、口縁部は大きく外開する。脚部は筒形で裾部が大きく外開するもの（8～11・15）と、直線的でラッパ状になるもの（12）及び小形で器高の低い前二者の中間的形態を示す（16・17）の3種がある。杯形土器（3・4）の出土量は少なく、確認したものは4個体あったにすぎない。3は口縁部が短かく、外反し、4は内面黒色処理されるが、共に基本的には椀形を呈する。小形丸底形土器で図示できるもの（5～7）は3点にすぎない。5は小形の手捏的で、6は平底になる。甕形土器は比較的多く出土してい、量的には出土量の3分の2以上ある。頸部が「く」の字形になり、口縁部が大きく外開し、中位に鋭い稜を構成する所謂有段口縁の甕形土器が3個体出土している他、後出のやや小形の口縁部が外反して長胴化するもの（22・23）がある。またこれらの底部も多く出土している。石製品として滑石製勾玉（29）、鏡（30）の模造品が各1点出土し、鉄製品では両丸造三角形式平根形鉄鏃（31）及び同型（32）が出土している。

第3節 溝 址（第4図、第3図版）

遺構 第1号遺構の東壁を破壊し、地形に添って流下するU字形の溝で、第1号遺構下で2分流する。幅60～70cm、深さ40～50cmで、覆土は黄褐色粘質土につつまれた砂利層であって、自然流によるものと思えるが、人工溝に後の洪水による鉄砲水の影響とも考えられ、即断はできない。この他、本遺構西に幅約25cm、深さ10cm前後の凹地状溝がある。これは明らかに覆土から自然流と考えられる。

遺物 大きな溝より須恵器杯形土器小片を2点底近くより検出したのみである。

第4節 土層序（第6図、第5図版）

表土は中庭という性格から、削平の上、黄褐色砂質土が客土され整地される。以下上層（II層）から最下層の大礫混り黄褐色砂質土層（VI層）の1.4m間に、基本的層序として5層に区別でき、この間の各層は砂利を主体とする土層で、内に氾濫流跡の痕跡を残す。ことほどさよう本地においては神田川の押し出しのものすごさを想定させる。遺構は明確にはVI層に掘り込まれていたものをもって確認した。遺物の包含層はその上部のV層で、小礫混り黒色粘質

土層で、縄文時代から平安時代の遺物を内包する。この層の厚さは20~55cmと不整間隔である。

第5節 その他の出土遺物（第8図、第6図版）

調査地の東端で、神田川に隣接する地点（第1号遺構含）から縄文時代の遺物が集中的に出土したが、その量は多くない。またその所以外からの出土はないし、遺構も伴わない。

第1類（1） 貝殻腹縁による条痕を残し、条線は幅の広い平行沈線状になる。器形は深鉢形を呈すると思われ、破片は体部付近である。器体は薄く0.6mmを測り、表面は前述施文により飾られ、内面は指圧痕が残り凹凸がある。胎土に小砂・石英粒を含む。焼成はやや不良で、軟弱である。色調は淡黄褐色を呈する。周縁は磨耗しており、上流からもたらされたものであろう。

第2類（2） 底部付近の破片で、上から下への平行条線の整形的施文が施こされる。器体は比較的厚く1cmを測り、胎土に小砂・石英粒を含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

第3類（3） 曲線による区画文を主文とし、内に浅い平行条線を配し、区画外の平行条線を磨消する。深鉢形体部破片である。器体は1cmと厚く、焼成は良い。胎土に小砂・石英粉を含み、色調は赤褐色である。

第4類（4~12） 平行沈線を主体とする一群を本類とする。4・5は同一土器片で、口縁端部は丸く仕上げられ、緩い波状口縁を呈する深鉢形土器片と考えられる。口縁部下に幅の広い、不整間隔の浅い三条の沈線を特色とする。整形はヨコヘラナデによっているものと思われ、この沈線間にまで及ぶ、色調は黒色（一部は再焼成を受け赤褐色を呈す）。焼成は良好で、胎土に小砂・石英粉を含む。器体の厚さは7mmである。6・7も前者に似る特色を有するが、波状頂部は棒状工具の押さえを受け凹む、沈線間にナデ整形が施こされず、また焼成も良くなく、全体に雑なつくりである。赤褐色を呈し、胎土に小砂・石英粉を含む。8・9も三条の平行沈線をめぐらすが深い。口縁部は外反する特色がある。赤褐色を呈し、焼成は良い。器体の厚さは頸部屈曲部で1.1cmを測る。10は2条のしっかりした深い平行沈線がめぐらされる。焼成は良く、黒褐色を呈する。胎土に小砂・石英粉を含み、器体厚は8mmである。11は深鉢形土器体部屈曲部付近の破片と思われ、1条あるいは2条の左廻りの沈線がめぐる。整形はヨコヘラナデでていねいである。焼成は良く、淡黄褐色を呈す。器体の厚さは5mmと薄い。12は口縁部付近の破片で、細くはあるがしっかりとした平行沈線が施文され、縦にI字文様沈線を有するようである。焼成はやや不良で、赤褐色を呈し、胎土に小砂・石英粒を含む。器体は厚く1cmを測る。

第5類（13） 無文の、粗製深鉢形土器で、口縁部に小突起を有する。焼成はやや不良で、

赤褐色を呈する。小石・石英粒を含む。8 mmの器体である。

第6類(14) 浮線網状文で飾られる深鉢形土器で、波状口縁になる。整形はヘラナデによりていねいに仕上げられる他、補修孔と思える1孔を有する。焼成は良好で、黄褐色を呈する。胎土は精選されているようで、小砂・石英粉を含む。器体の厚さは8 mmである。

第7類(16, 17) Aトレンチの前記縄文時代遺物出土地と祭祀遺構の中間の位置付近より検出したもので、包含位置は包含層の上部にあった。出土遺物は3点のみで、すべて甕形土器片である。16は小形の、口縁部付近の破片で、波状文は雑である。17は体部下半の破片で、整った波状文が施こされる。共に赤褐色を呈し、焼成はやや不良で、胎土に他と比較し大粒の小砂・石英粒を含む。器体厚は16が薄く4 mm、17が7 mmを測る。

石器(15) 調査地の遺構外からの石器は1点のみで、頁岩製の打製石斧がそれである。長軸13.4cm、最大幅6.3cm、厚さ2.6cmをそれぞれ測る。

第4章 結語

本調査は緊急発掘調査という性格上充分な調査体制のもとに実施されたとはいえないが、事業主体者、同請負者及び西条小学校職員をはじめ、同校PTA他多勢の協力のもとに行なわれたもので、それなりきの成果を得ることができた。

当地は中・近世の歴史遺物が多いことは先に触れたが、その基本あるいは過程を示す重要な遺跡及び考古学的資料があることは、稲葉遺跡・舞鶴山古墳群の調査報告書等を見るにつけて、益々その感を深める。本遺跡がのる扇状地形上の各種遺跡も前記の遺跡と相互にかかわりをもって成立してきたことは確かなことと思えるし、その媒介に神田川の影響が強いこともまた事実である。このような中で本調査地は中村遺跡として周知されており、それは地形的制約により、扇状地形内の微高地及び中洲状地形の中で上位に位置し、より神田川に近接する地点である。そのため土層序にみられるとおり同河川による押し出しの影響を受け砂利層を基本土層とし、それに遺物包含層を除き、砂質土層が混入するものが覆土となる。この土層の深さは表土から遺構検出面までVI層あり、約165cmを測る。各層中には洪水等の出水によりできた溝址が確認でき、断面土層を観察する限りでは自然流である。これらは本遺跡の性格を表わしているものと考えられ、遺物包含層たる小礫混り黒褐色粘質土層を除いて、上部土層中からは遺物を認めることはなかったが、ただII層中より近代陶磁器片が3点出土したにすぎなく、本地形において比較的安定した時期の所産と思われる。

遺構 第1号遺構・祭祀・溝址を検出したのみである。この他遺構ではないが縄文時代遺物集中地点を確認した。第1号遺構は2m内外の深い所謂竪穴住居址的であり、住居址とも考えられるが、住居たる根拠の柱穴・カマド等を確認できなかつたし、焼土の位置・分布範囲より推定し、一般生活址を想定することは無理であるように思える。また北壁の張り出し部の集石遺構は溝址により破壊を受けて本来形態は不明であり、熱を受けた様子、焼土等が認められないところからカマドとは考えられなく、また掘り込み状態から他の土壤とも考えられない。意味不明の遺構である。このように考えると、多量の焼土及び出土遺物等のあり方は考え合せると、特殊遺構たる祭に関与するものであろうと思われる。本遺構の存続期間は出土遺物等から一時的なものと想定され、時期は鬼高一期に比定されよう。

祭祀遺構は不整形円形のプランで、浅い凹状を呈し、壁に添って焼土を残し、覆土中に礫が散在し、その中に土器片が散布するという特色がある。この遺構は遺物の出土状態からみて、一時的短期間に形成されたものでなく、少くとも三時期あるように思う。それ故にプランの不整形さの理由付もまた可能になってくる。第1期は南側に集中して出土した有段口縁をなす甕形土器を主体する一群であるが、その範囲、形状は後の祭のため搅乱され不明である。五領期

後半に比定されるものであろう。第II・III期は後続の和泉・鬼高期内に併行されるもので、該期の祭祀を明確に分離することはできなかったが、中央より北西部から小形丸底形土器・石製勾玉・鏡の模造品・鉄鎌等の遺物が比較的近接して出土しているところからみれば、和泉期の中心がその付近にあったことは確かであろう。高壙形土器・甕形土器片が遺構全体に散布しており、特に高壙形土器片の偏よりは認められなかった。さてこの遺構の祭祀形態であるが、浅い凹み状の竪穴を掘り、その中で火をたき、祭を行い、祭終了、燃焼後、使用土器等用具を投棄し、更に自然石を投入するという順を追うようであり、土器片の出土状態をみると、この事実は間違いないように思う。次に第1号遺構を含め祭の対象を考えるに善光寺平から検出された出土状態が同種のものとやや趣を異にしている。自然物を対象とするもので、三角錐形の山を崇拜し、そこに水源を求める水靈信仰と合致したものと考えられる長野市駒沢祭祀遺跡^{註1}がその例である。住居集落内遺跡祭祀遺構として、更埴市城内の遺跡で検出された竪穴住居形態のものがあり、その内容は神殿的利用をうかがわせる。これに対し本祭祀遺構からは三角錐形の山は見通せなく、また第1号遺構においても住居址とも判断できなく、これまた集落内祭祀と背首できない。ただ神田川に隣接しているので、水靈信仰と結びついたものであることは言うまでもない。それでは本遺構の対象はどこにあったかと考えるに、初期にあっては舞鶴山古墳と深い関係があるのではないかと想定する。即ち古墳の築造年代と一致し、首長者埋葬後もそこにおいても祭事が行なわれていたということである。その後自然物を対象とする信仰祭事を混え本遺構が成立していったと考えた方が良いようである。

溝址は土層序にみられるように偏平・不整形なものではなく、U字形で深くしっかりとしているところからみれば人為的なものと考えられるが、覆土は洪水によりもたらされた土砂であるので、自然流とも考えられ、今後の調査がまたれる。時期は覆土内遺物より平安時代以前のものである。

その他出土遺物には各時期あり、弥生時代後期土器（箱清水式）片・古墳時代土器片・平安時代土器片の数点を除いて、他は縄文時代土器片である。縄文時代土器片のうち早期・中期（第8図1・2）を除いては原位置に近い出土状態であり後期・晩期の土器片である。後期土器片では称名寺式・加曾利B式（3・11～13）・宮滝古式（4～7）・同新式（8～10）^{註4}に比定されるものがあり、晩期氷I式に比定されるもので浮線網状文で飾られ、文様帶上部に一孔を有し、補修孔ともひもでつるすための孔とも考えられる。これらの遺物は神田川との深いかかわりを有した人達が残した遺物であるので縄文時代後・晩期研究の重要な資料となると思われ、神田川周辺の今後の調査に期待される。

以上今回の調査で検出した遺構・遺物を中心にまとめてみたのであるが、調査地が限定していたため、当該各期の生活址とのかかわりの一端に触れることができなく残念であった。祭祀遺構という当初予想もしなかった新発見があり、また当地に神田川と深い関係にある縄文時代後、晩期の遺跡の存在が確認されたことは大きな成果であった。今後ますます本扇状地で考古学的成果があがるに従い、松代地区の古代復元がなされるものと思える。

— 第4章 註 —

- 註1 本遺構は黒色小礫混り粘質土層を掘り込んでつくられたものであったが、検出はこの焼土を追求することにより比較的容易であった。また焼土は壁面にのみ残存し、北にいくに従い顕著で、厚くなる。床に焼土を残さないのは水分を含んだこの土層の性質によるものと、後の擾乱によるものと考えられる。
- 註2 昭和42年長野市教育委員会により緊急発掘調査され、多量の後期各種土器・石製品・土製品・鉄器が出土しており、湧水・焚火跡等を検出している。対象山岳・水源を飯縄山・駒沢川に求める。
- 註3 木代修一・岩崎卓也『城の内』更埴市教育委員会 昭和34年
- 註4 市原寿文・麻生優『西貝塚』静岡県磐田市教育委員会 昭和36年
この報告書で宮窓式土器の集中的出土地は最東端であろうとするが、長野市大清水遺跡でもこの種の土器片が多く出土している。

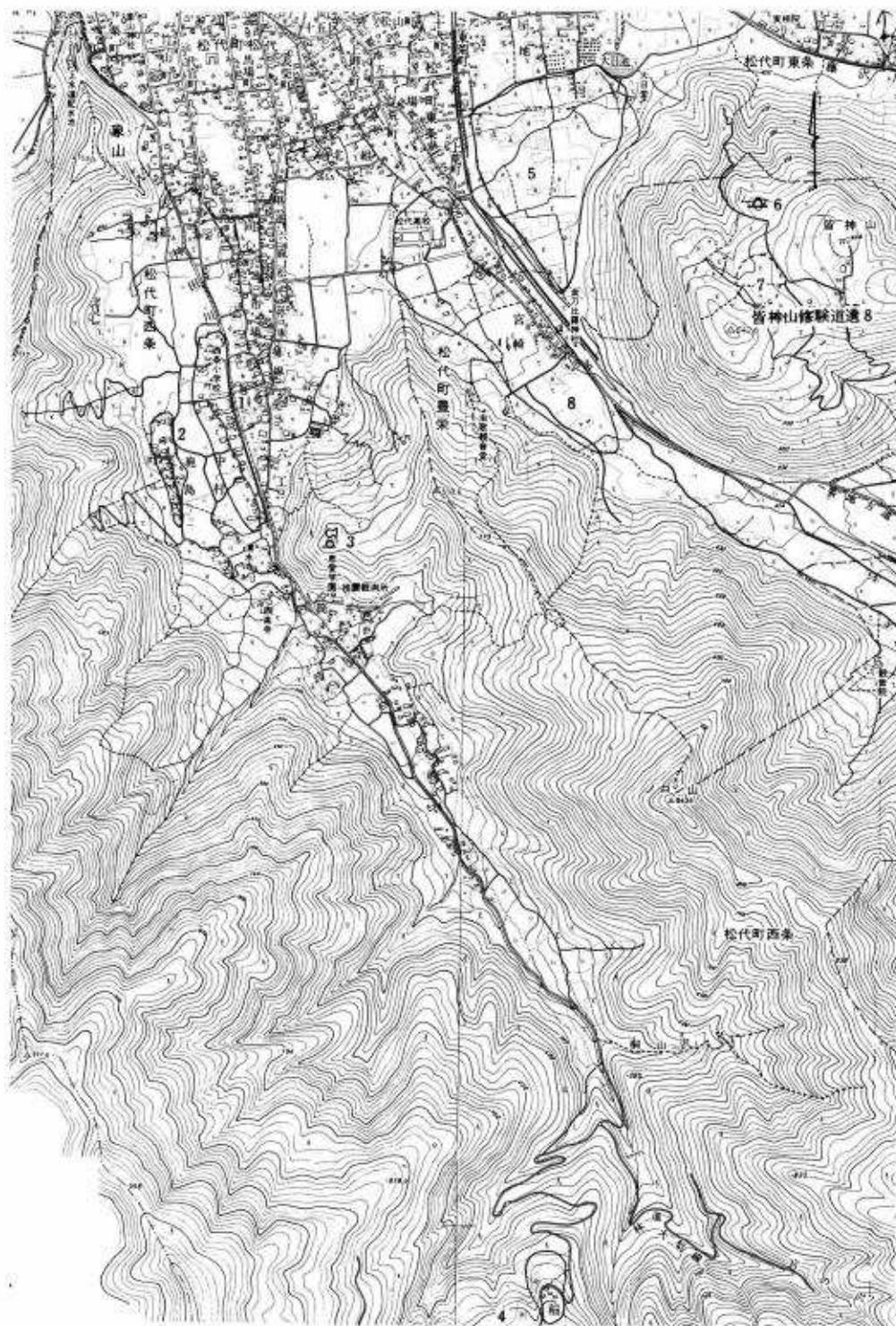
第1号 造構出土遺物一第7図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
		高さ	口径	底径					外面	内面		
1	高杯				脚部・円筒形・裾部外開 タ・タ・タ・タ	外面タテヘラ・内面しづり痕ヘラナデ タ・タヘラケズリのちナデ ヨコナデ	小砂	不良	黄褐色	黄褐色	焼土	土師器
2	*						*	良	赤褐色	赤褐色	*	*

祭祀造構出土遺物一第7図

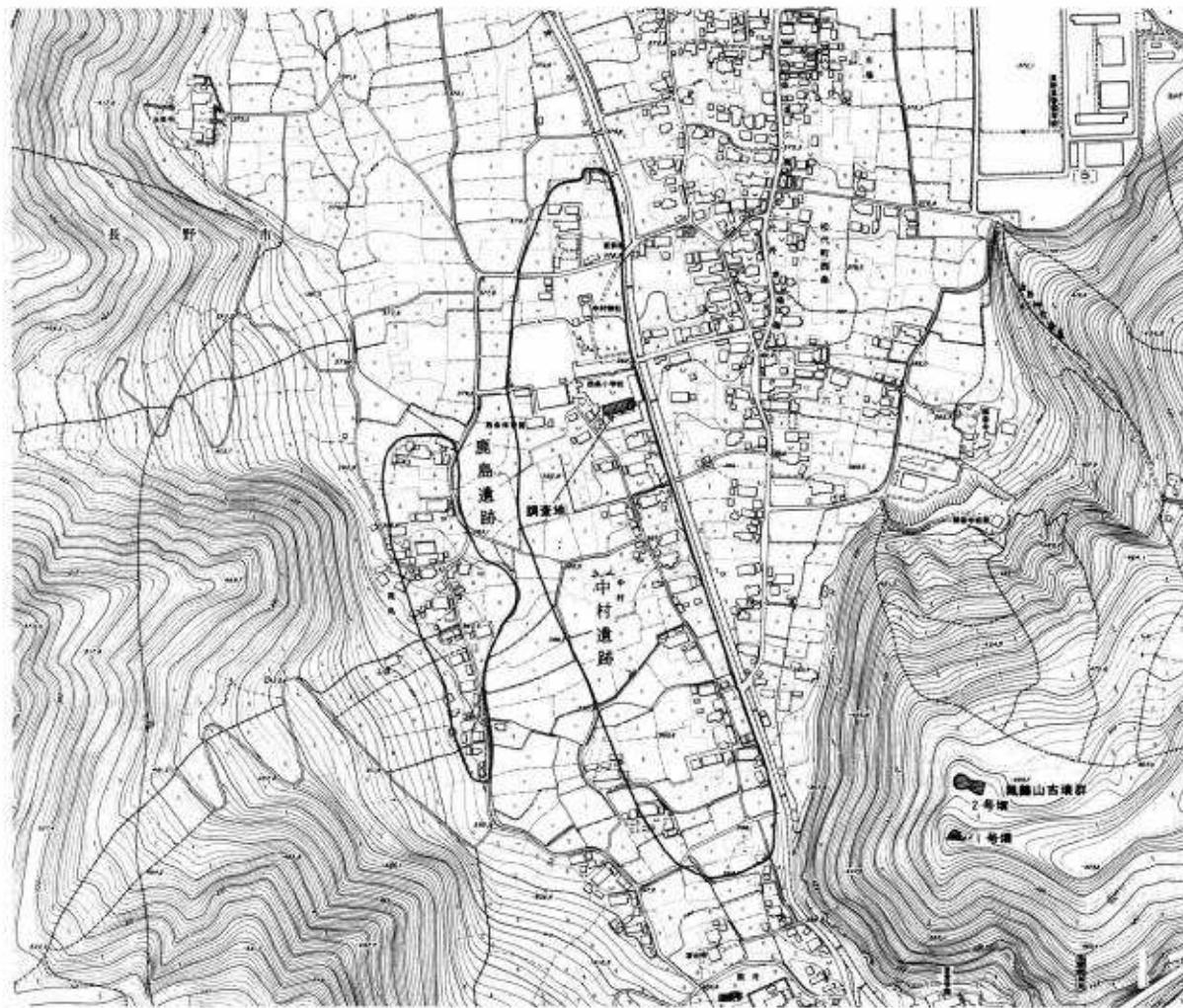
3	杯	78.0		体部橢形・口縁部外反・底部欠損	内・外面ともヨコナデミガキ	小砂	良	黄褐色	黄褐色	覆土(床面)	土師器	
4	*	11.9		直線的・	外面ヨコナデ内面*	*	*	赤褐色	黑色	*	*	
5	小形丸底	3.5		小形手捏の成形・偏平・口縁部を欠く	ていねいなヨコナデ	*	*	黒褐色	黒褐色	*	*	
6	*	5.8	5.2	体部球形・口縁部内傾・平底	外面ヨコナデ・内面ヨコナデ横ヨコナデ	*・黄雲母	*	赤褐色	赤褐色	*	*	
7	*	(最)7.3		外開・丸底	ヨコナデ・ヘラケズリ・内面ヨコナデ	*	*	茶褐色	茶褐色	床面	*	
8	高杯	12.0	14.1	13.3	环部口縁外反・脚部円筒形・裾部外開	ヨコナデ・器面あるる	*	不良	赤褐色	赤褐色	覆土(床面)	*
9	*	15.7		直線的・	筒形・	环部ヨコヘラナデ・脚部タテヘラナデ	*	*	*	*	*	
10	*	18.4		外反・	薄い	*	*	*	*	*	*	
11	*	16.7		円筒形・裾部外開	ヨコヘラナデ・器面あるる	*	*	*	*	*	*	
12	*	13.6 (14.9)	13.2	直線的・	直線的・ラバ状	タテヘラナデ・	*	*	黄褐色	黄褐色	*	
13	*	14.2		有段・脚部欠損	*	*	良	*	黑色	*	*	
14	*	14.6		外反・	*	・器面あるる	*	不良	*	黄褐色	*	
15	*			脚部円筒形・裾部外開	*	*	*	*	赤褐色	赤褐色	*	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼色調		出土状態	備考
		器高	口径	底径				成	外面	内面	
16	タ			9.7	△直線的・ラバ状	タ · タ	△ · △	△	黄褐色	黄褐色	タ
17	タ			12.1	△ ·	タ · タ	△	△	タ	タ	タ
18	甕			4.7	小形・底部中央凹む・底部破片	外面ヨコナデ・内面ナデツケ	小砂・石英	良	赤褐色	赤褐色	覆土(床面) 土師器
19	タ			20.7	口縁部大きく外反・有段・頸部「く」の字	△ · ある	△ · (多)	不良	黄褐色	黄褐色	△
20	タ			24.6	△ の外反は短かい・△口縁端面取	タ · タ	△ · △	良	赤褐色	赤褐色	タ
21	タ			28.1	△ · △ · △ · △ 大形	タ · タ · タ	△ · △	△	タ	タ	タ
22	タ			12.0	△ 直線的外開・頸部「く」の字・長胴	内・外面ヨコナデ・タテナデ	△ · 石英	△	茶褐色	茶褐色	△
23	タ			18.1	△ 屈曲・外反・△	△ · △	△ 黄雲母	△	△	△	△
24	タ			6.6	底部上底・球胴(?)	ヨコナデ・タテナデ	△ · 石英	不良	赤褐色	赤褐色	△
25	?			4.5	△ 中央凹む・球胴	△ · △	△ · △	△	△	△	△
26	△			5.5	△ 上底的 · △	△ · △ · △ · 内面ある	△	△	黄褐色	黄褐色	△
27	△			5.0	△ 丸味・長胴(?)	△ · △ · △ · △	△	△	△	△	△
28	タ			6.4	△ 立ち上り平底・球胴(?)	△ · △ · △ · △ · △	△	良	赤褐色	△	△
29	勾玉				コの字形・偏平	ミガキ	滑石製			△	模造品
30	鏡				円板・偏平	△	△			△	△
31	鉄鎌				角棒状		鉄製			△	
32	タ						△			△	

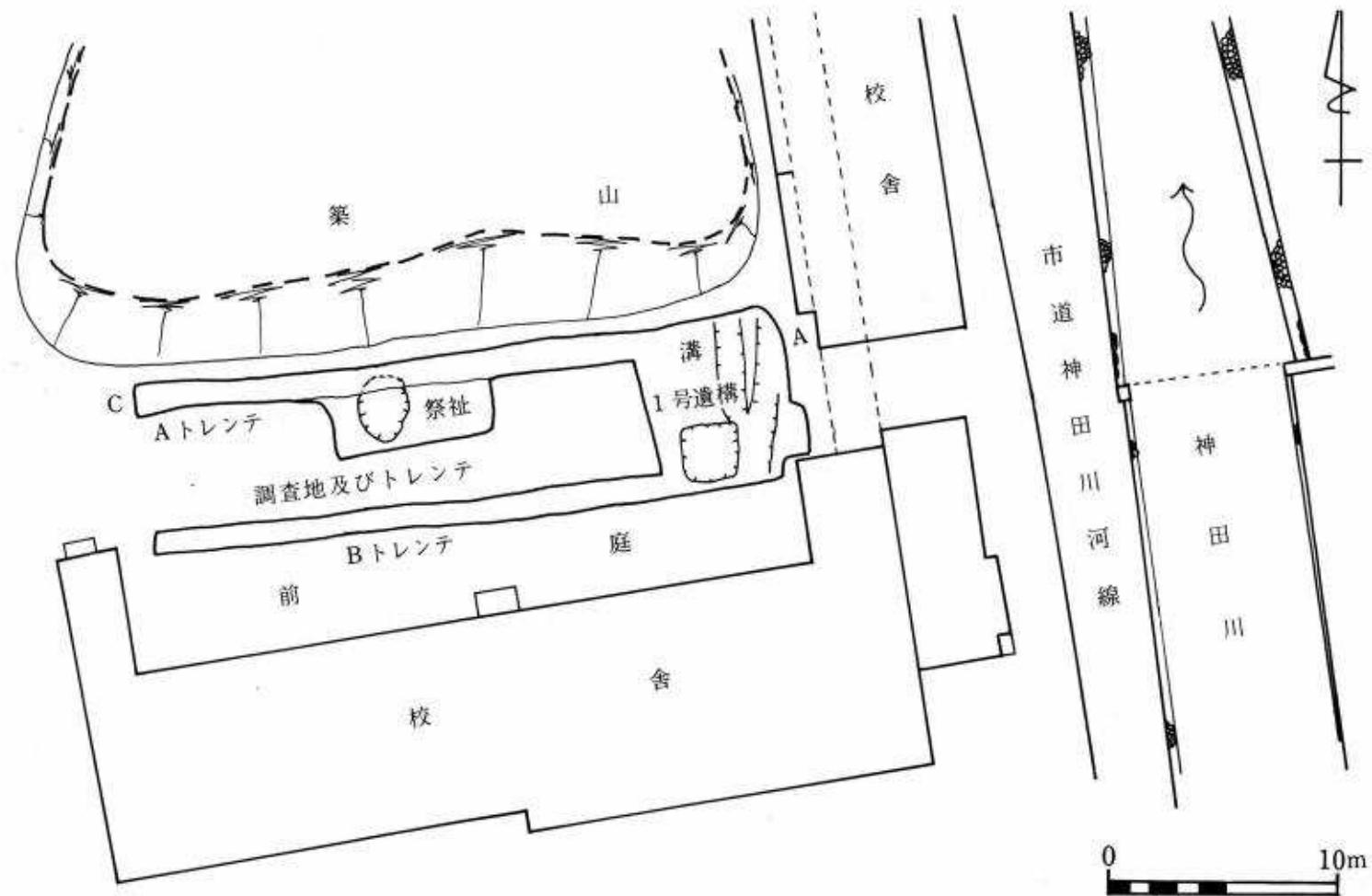


第1図 中村(西条小学校)遺跡周辺主要遺跡分布図(1 : 40,000)

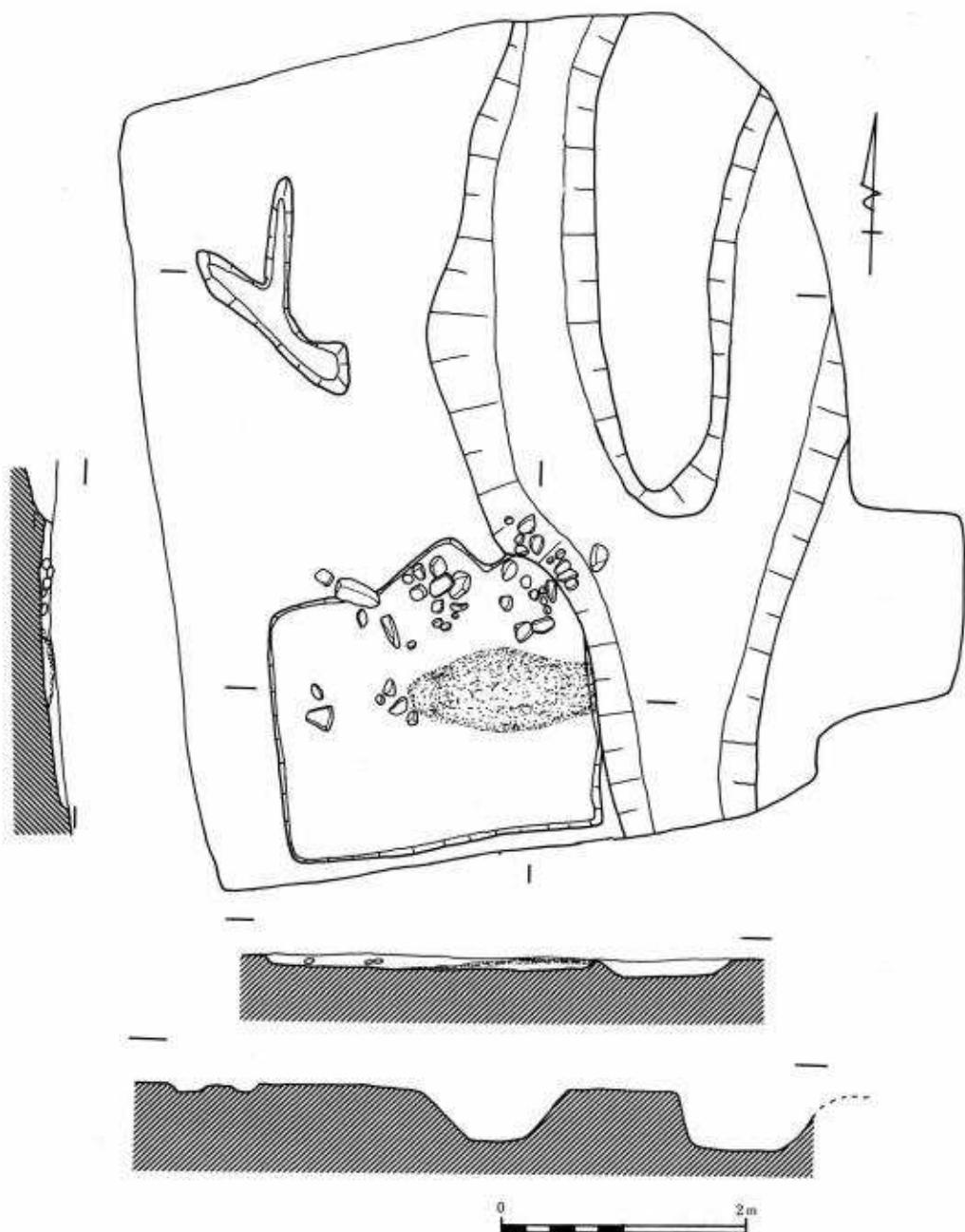
1. 中村(西条小学校)遺跡
2. 鹿島遺跡
3. 舞鶴山古墳1.2号墳
4. 稲葉遺跡
5. 屋地遺跡
6. 小丸山古墳
7. 皆神山遺跡
8. 虫歌・宮崎古墳群



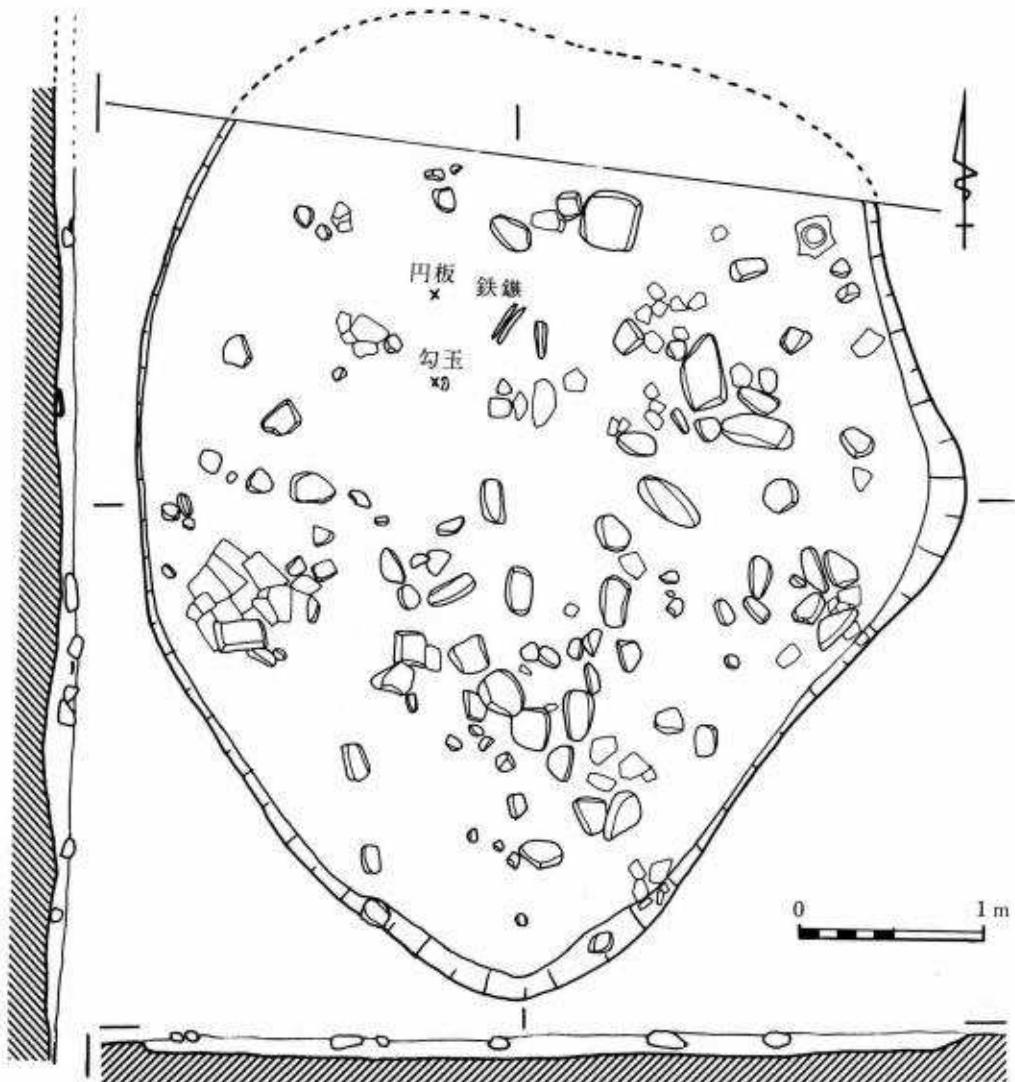
第2図 遺跡地形図(1:5000)



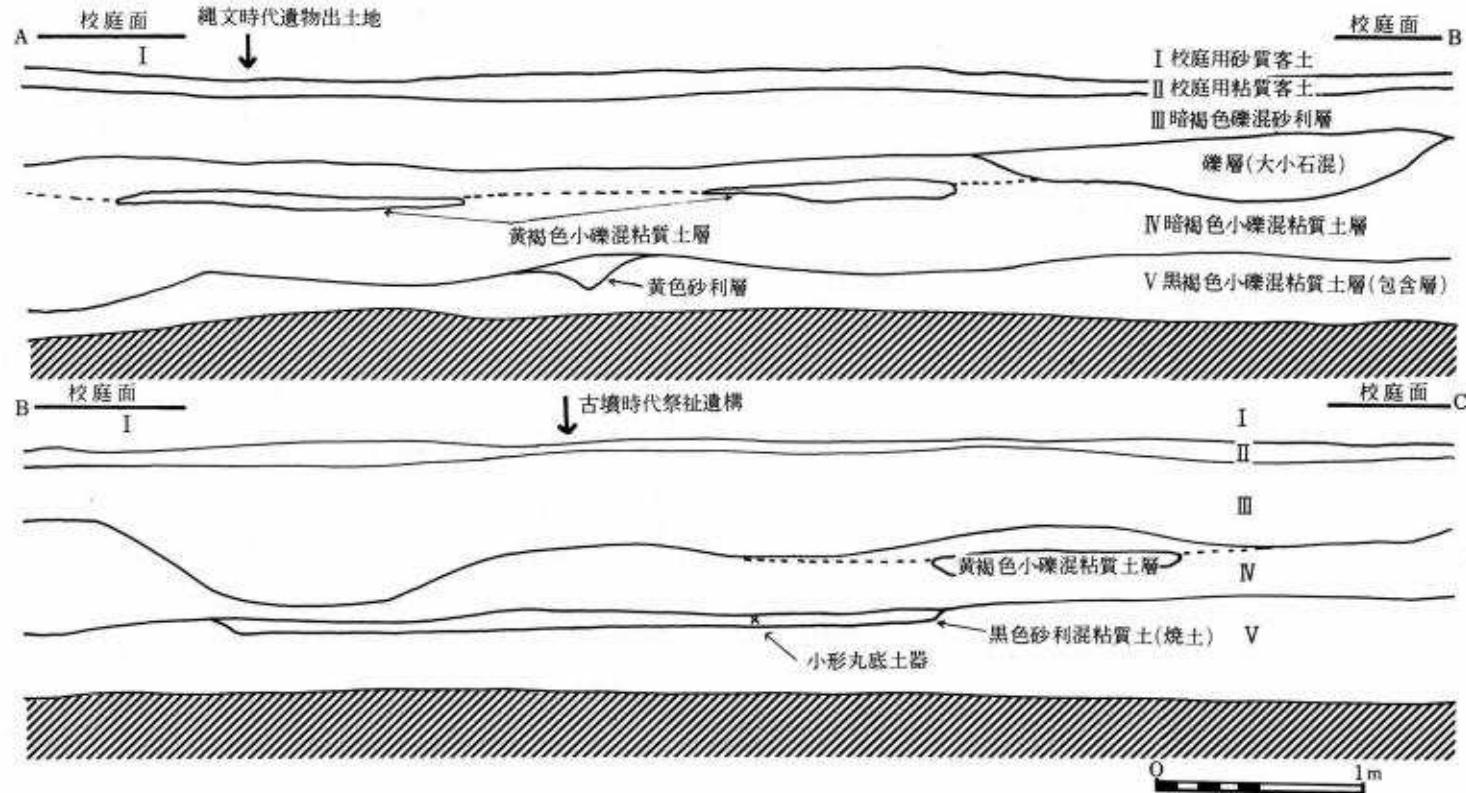
第3図 調査地及び遺構配置図(1:400)



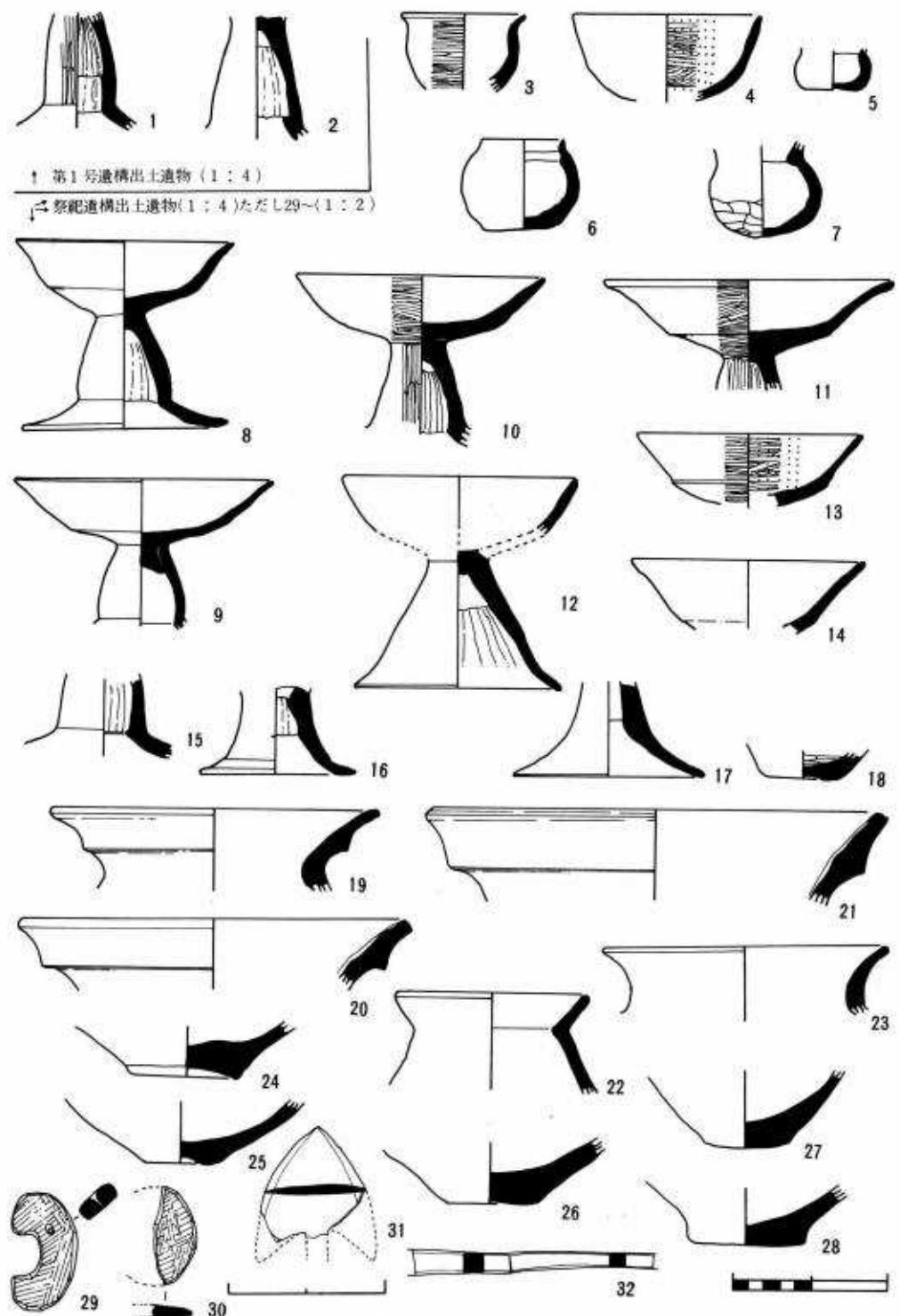
第4図 第1号遺構・溝址実測図(1:60)



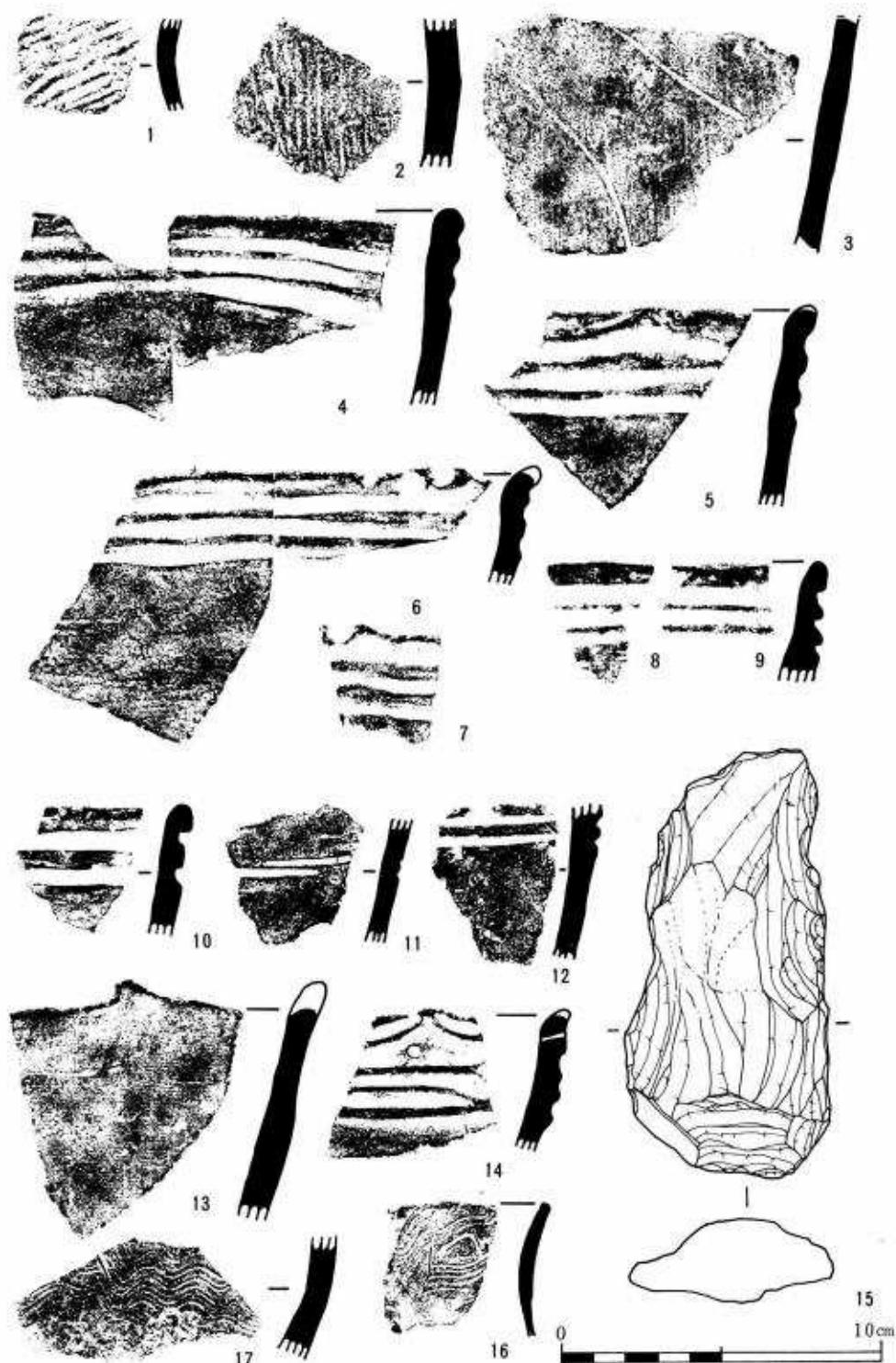
第5図 祭祀遺構実測図(1:40)



第6図 Aトレンチ東西断面土層序図(1:20)



第7図 遺構出土遺物実測図(1~28 (1 : 4), 29~31 (1 : 2))



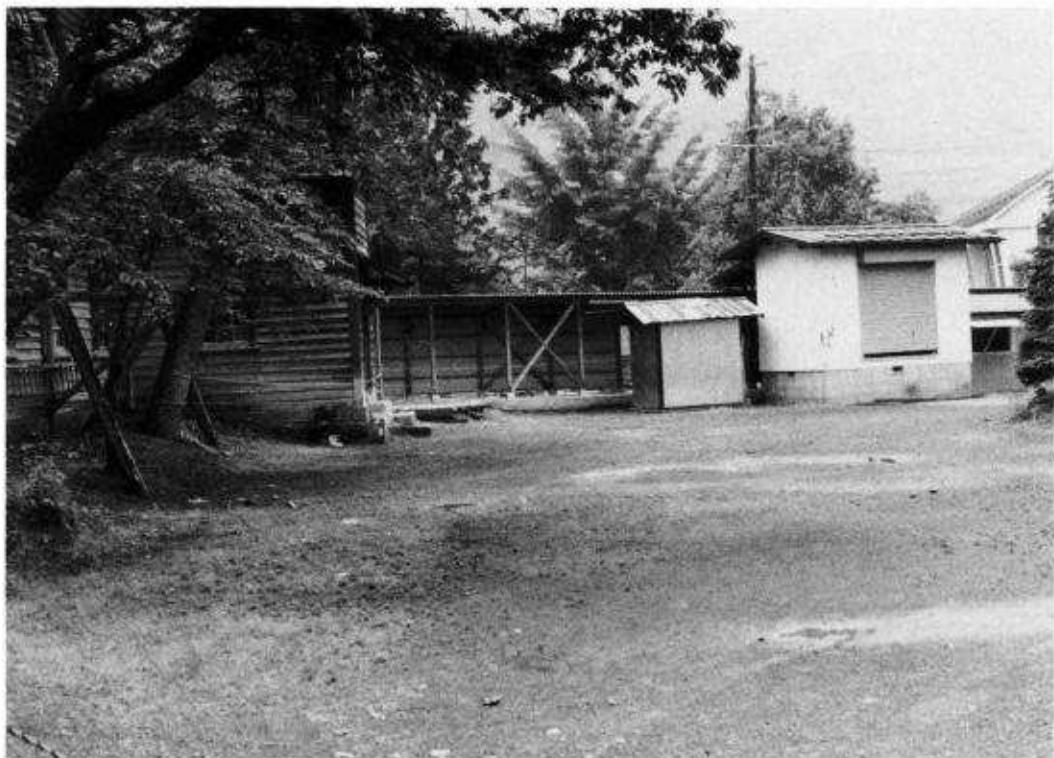
第8図 その他の出土遺物実測図



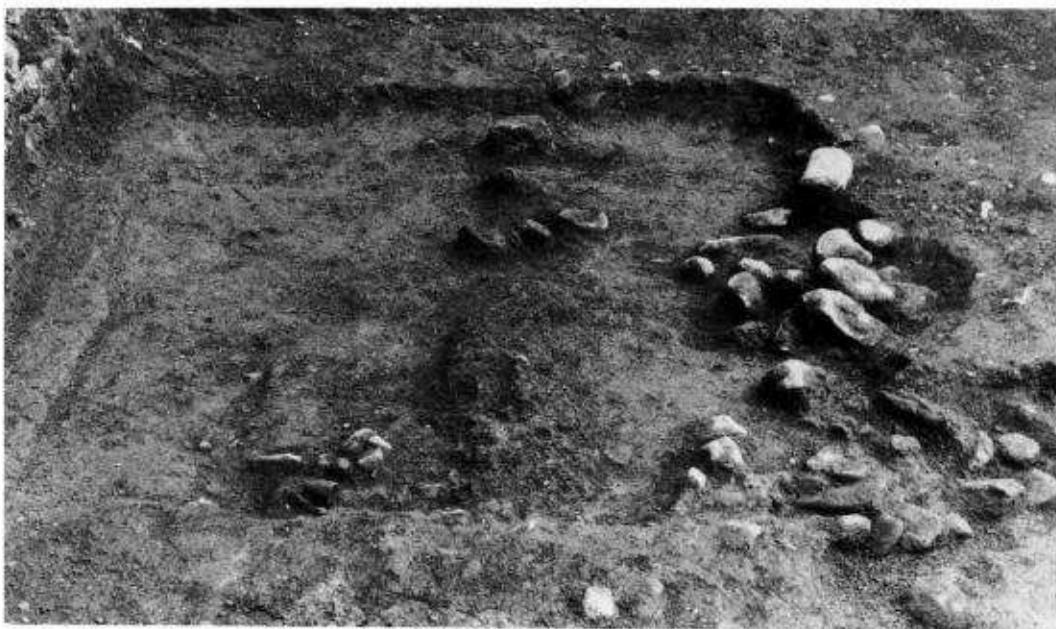
1. 西条小学校全景(舞鶴山より)



2. 改廃校舎(北西より)



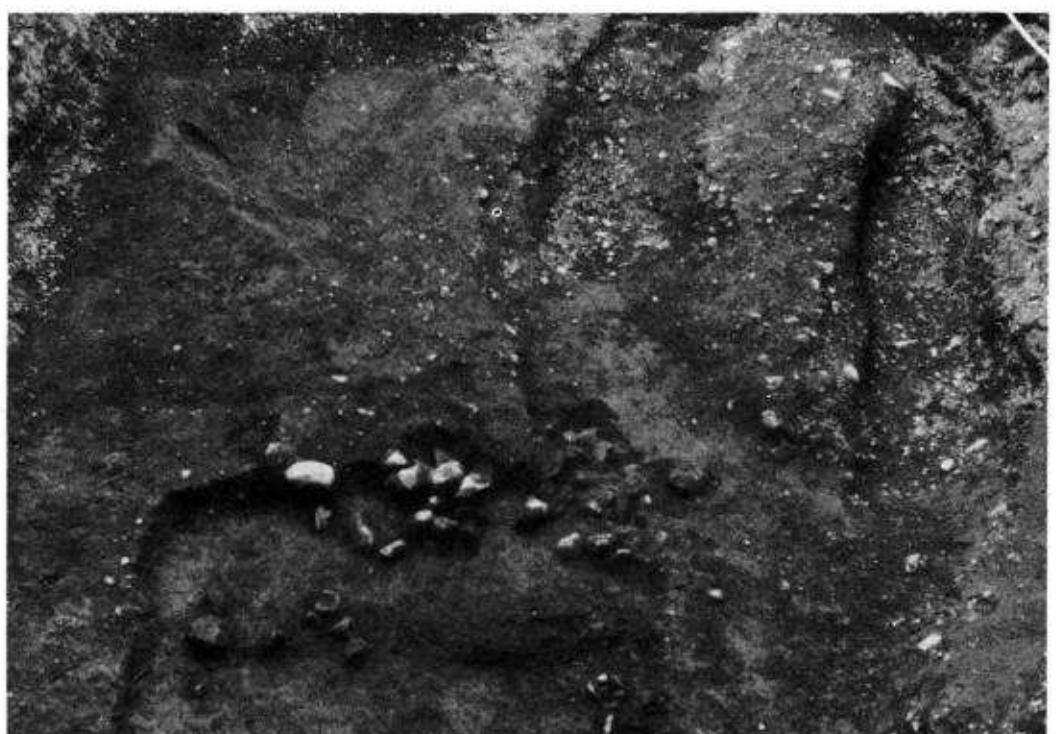
3. 調査地(東より)



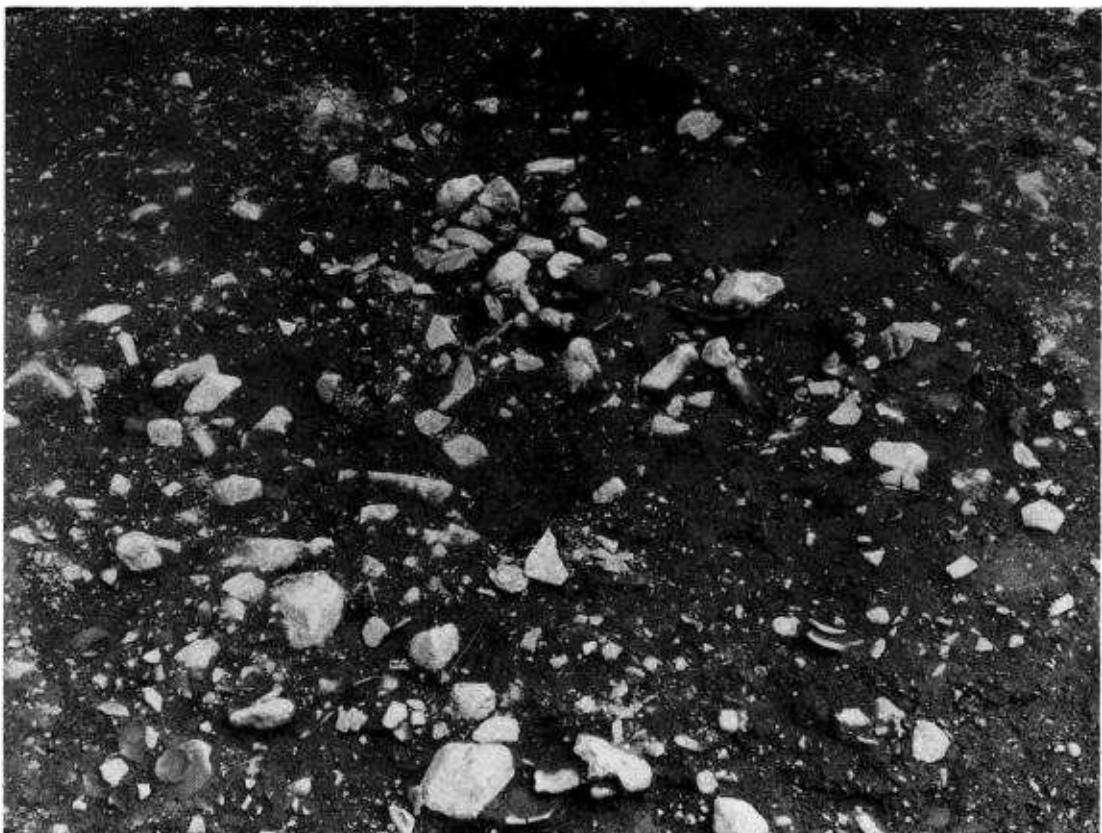
4. 第1号住居址(東より)



5. 第1号住居址(南より)



6. 溝址・第1号住居址(南より)



7. 祭祀遺構(北より)

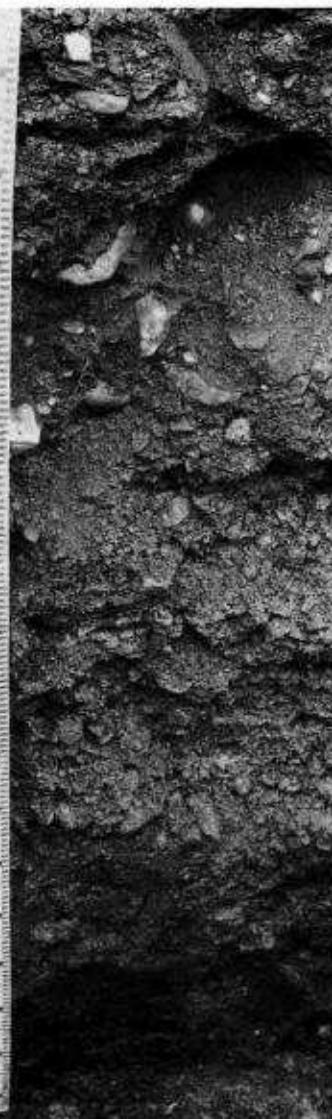


8. 同部分拡大(北西より)

第五図版 土層序・調査スナップ



9. 土層序



10. トレンテ調査



12. 遺構検出



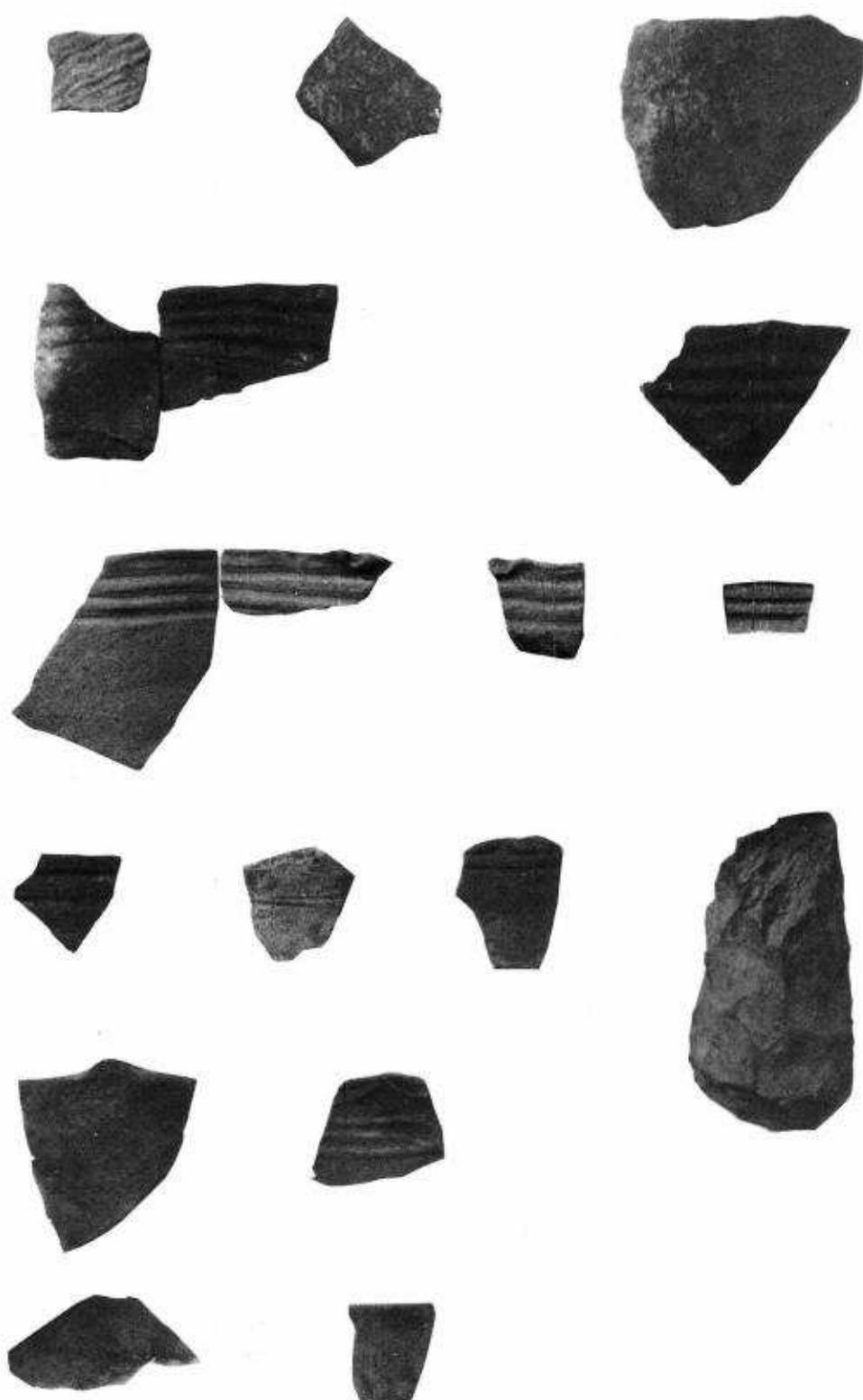
11. 土層確認



13. 調査

第六図版

縄文時代土器・石器



第七図版 祭祀遺構出土遺物



長野市の埋蔵文化財第3集

中 村 遺 跡

— 松代西条小学校地点 —

昭和53年3月25日印刷

昭和53年3月30日発行

編 者 長野市教育委員会
発行人 長野市西和田470
印刷所 信毎書籍印刷株式会社